

修士論文（要旨）
2024年1月

日本語学習のプロセス
—香港の独習者の事例から—

指導 青山 文啓 教授

国際学術研究科
国際学術専攻
グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム
222J1007
李倩瑜

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

A Case Study on the Process of Learning Japanese of Autonomous Learners in Hong Kong

Sin Yu LEE

222J1007

Master of Arts Program in Global Communication
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Fumihiko Aoyama

目次

はじめに	1
第1章：独習と学習	1
第2章：先行研究	2
2.1 第二言語習得	2
2.2 学習者オートノミー	3
第3章：香港の背景と日本語教育	4
第4章：調査方法および対象	6
4.1 アンケートの内容	7
4.2 調査協力者の背景	9
第5章：独習について	10
5.1 動機づけと独習の維持	11
5.2 独習における“独習材”	13
5.3 独習ノート作成	14
5.4 教育機関での教材使用	19
第6章：インプットとアウトプット	20
6.1 インプット	21
6.1.1 インプットと関心	21
6.1.2 インプットと現実味	23
6.2 アウトプット	26
6.2.1 会話データ	26
6.2.2 別言語への言い換え	27
6.2.3 教育機関でのアウトプット	30
まとめ	31

参考文献

補遺

インターネットが発展した現代、指導によらず独自に語学学習を始める人が増えている。日本語の学習者数についての調査は、多くの場合日本語教育を実施する教育機関を対象に行われてきた。独習者の数は統計が困難でありその定義も曖昧だが、現代の日本語教育を考えるさい、独習者は無視できない存在になりつつある。本研究は、アンケートおよびインタビュー形式を採用して、実際に日本語の独習経験がある協力者の話を聞き、データを収集する。2名の協力者と筆者自身の経験を比較し、インプットとアウトプットの方法を基に独習と教育機関内の学習過程の違いを探り、より効果的な独習過程について提案する。また、独習において効率的と考えられる学習法を、教育機関の日本語授業に取り込む可能性についても考察したい。

アンケートとインタビューを併用し、計3名の調査対象者の日本語独習経歴を調査する。調査対象者は日本語能力試験（JLPT）のN1・N2に合格し、香港在住・出身の独習者に限定する。N1・N2レベルに到達するには、相当な学習期間が必要であり、初歩から合格に至るまで“完全な独習”は不可能に近い。そのため、今回の調査では教育機関内で四年以内の指導を受けた経験がある人についても独習者に入れて考える。

結論として、有効なインプットは、リソースへの関心と現実味がもっとも重要である。独習においては、関心に関わる内容を独習者自らが選択したうえで、学習材として知識を吸収することが可能になる。独習ノートは勉強した内容をまとめることはあるが、日本語能力試験（JLPT）に関連する内容が大半を占めている。文字と音声のインプット・アウトプットは教育機関などに入り、指導教員によるコントロールがなければ、バランスよく取り入れることは難しい。非日本語環境下で日本語の独習において、現実味のあるインプットはインターネットによって補っても、アウトプットはやや不足している。また、香港の日本語教育状況を考えれば、教育機関内のネイティブによる日本語の授業はわずかであるため、授業内で現実味のあるリソースに接触することは難しい。だが、学習者の関心を取り込んだ授業内容や課題は多く見られるため、授業目的に合わせて学習者ごとに語彙や文法項目を印象づけることは可能と思われる。独習者で、教育機関に頼らない場合はSNSなどを通してネイティブとコミュニケーションを取ることも一つの手段として有効と考えられる。調査からは、独習者は多く動画共有サイトやアニメなど、インターネットを活用し学習材を見つける実態が浮かび上がる。音声や画像を伴う学習材が大半を占めるが、現実味があり学習者が関心を示すような日本のはやりの文化を、教育機関の授業に取り込めば、学習効果をさらに向上させることが期待できるだろう。

参考文献

- Krashen, S. (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. New York: Pergamon.
- Krashen, S. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Lightbown, Patsy M. & Nina Spada (2013) *How Languages are Learned*. Oxford University Press.
- Sinclair, B. (2000) Learner autonomy—The next phase? In B. Sinclair, I. McGrath, & T. Lamb (Eds.) *Learner Autonomy, Teacher Autonomy—Future Directions*, pp. 4-14. London: Longman.
- Swain, M. (1995) *Three Functions of Output in Second Language Learning*. In: Cook, G & Seidlhofer, B., *Principle and Practice in Applied Linguistics*, pp. 125-144. Oxford University Press.
- Oller, J. W. & Ziahosseiny, S. M. (1970) The Contrastive Analysis Hypothesis and Spelling Errors. *Language Learning*, 20, pp. 183-189.
- 青木直子/尾崎明人/土岐哲[編](2001)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 青木直子/中田賀之(2011)『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために—』ひつじ書房
- 青木直子/バーデルスキー・マシュー[編](2021)『日本語教育の新しい地図—専門知識を書き換える』ひつじ書房
- 植田麻実(2001)「学習者の自律と動機づけ」『日本実用英語学会論叢』2001 巻9号, pp. 29-46.
- 国際交流基金「香港 (2020 年度)」
URL : <https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/hongkong.html>
(最終閲覧日 : 2023 年 12 月 28 日)
- 小嶋英夫/尾関直子/廣森友人[編](2010)『英語教育学大系 第6巻 : 成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』大修館書店
- 白井恭弘(2008)『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か—』岩波書店 [新書]
- 大学英語教育学会(2006)『言語学習と学習ストラテジー —自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ』リーベル出版
- 中竹真依子/櫻井千佳子(2016)「英語教育における学習ポートフォリオの活用 : 自律的学習者の育成に向けて」『The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』第6号, pp. 65-76
- パッツィ・M.ライトバウン/ニーナ・スパダ(2014)『言語はどのように学ばれるか—外国

- 語学習・教育に生かす第二言語習得論—』白井恭弘/岡田雅子[訳], 岩波書店
- 福池秋水(2020)『漫画に見られる話しことばの研究—日本語教育への可能性—』ひつじ
書房
- 香港日本語教育研究会(2014)「香港の日本語学習者減少の要因—調査報告—」『日本学
刊』第17号
- 香港日本語教育研究会(2020)「2019年香港日本語学習者背景調査」『日本学刊』第23号
- 宮副ウォン裕子(2002)「香港における専門日本語教育—歴史・現状・展望—」『専門日本
語教育研究』第4号
- 村上吉文(2017)『むらログ 2017: 冒険と多様性』 Kindle 版
- 村野井仁(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 横山紀子(2014)「言語習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割—単語の習
得調査の分析から—」『日本語国際センター紀要』第14号